

# ワールドカップ新潟開催における住民の意識変容に関する研究 ～特にボランティアの意識を中心として～

## A study of the shift in consciousness of the host residents on World Cup in Niigata ～ Especially focus in the consciousness of volunteer ～

佐藤 勝 弘\*・西 原 康 行\*\*

Katsuhiko SATO・Yasuyuki NISHIHARA

### はじめに

オリンピックやワールドカップは都市の活性化を図れるといった記号により、政治や経済と密接に結びつきながら、巨大化してきた。松村和則は、マックス・ウェーバーやアレン・グッドマンを引用しながら、「このようにスポーツが社会的現象として隆盛する背景として、(中略)『都市的生活様式』の定着化といった点があげられる」とし、都市と近代スポーツの記号的な相互のかかわりを慎重に述べている。その発端となった大規模スポーツイベントが、1984年に開催されたロサンゼルスオリンピックであると一般的に言われている。

オリンピック組織委員会委員長のピーター・ユベロスは、財源不足から衰退の一途をたどっていたオリンピックをビジネス化し、商品として売り出していったのである。メディアの発達、そして、ユベロスのマーケティング手法は見事に花開き、それまで赤字続きであったオリンピックの黒字化に成功した。オリンピックは、経済効果の極めて高い魅力的なイベントとして蘇ったのである。

それ以降、20世紀後半の地球規模における経済発展を中心とした社会とあいまって、スポーツ(大規模スポーツイベント)のビジネス化が進行し、多くの巨大で豪華なスタジアムや各種競技場が整備された。しかしながら、大会の開催前と開催中には、巨大な資本をもった企業や各種団体が招致都市を訪れ、瞬時に多くの利潤を獲得できるビジネスを展開

するが、大会の終了とともに、跡形もなくその開催都市を立ち去るのである。残されたものは、地方の小さな都市における巨額の負債と、速度の早い嵐が立ち去った後のような空虚な生活空間、そして、これらの負債や空虚さを全て背負うことになる市民たちである。つまり、オリンピックやワールドカップといった大規模スポーツイベントは、それまで数百年といった単位で、地道に築き上げてきたその小さな都市の文化や風土までも、瞬時に変えてしまうのである。

このようなオリンピックやワールドカップを中心とした大規模スポーツイベントの社会的な変化を背景としながら、社会科学の研究領域においては、この大規模スポーツイベントそのものの経済効果、あるいは、都市基盤整備による効果といった視点での研究が徐々に増え始め、今日に至っている。しかしながら、体育科学の領域における研究の多くは、大規模スポーツイベントの開催前、及び開催中だけに着目した地域住民の意識調査や、マーケティング調査といった瞬時の側面のみからとらえた研究がほとんどである。つまり、そのイベントが開催された後に残された遺産としての諸施設がどう運用されているのか、開催地の住民の生活や環境はどう変容していったのかといった視点からとらえた研究はほとんどなされていない。本研究では、開催後の住民の運動生活(特に、A. S.)やスポーツクラブにおける活動(= C. S. & 行なうスポーツ)がどのように変化

2003. 9. 1 受理

\* 新潟大学教育人間科学部 \*\*新潟医療福祉大学

したのかということについて、新しい視点での研究を試みる。具体的には、開催後の地域におけるスポーツ振興に自ら加わりながら、大規模スポーツイベントが地域のスポーツ振興とどのように関係性を保ちながら、有機的に生かされていくのかを、開催地における地域住民の意識の変容という指標で検証することにより、大規模スポーツイベントによる地域スポーツ振興の経営学的な政策の一助を得ることを目的とする。

## 研究方法

### 1. 研究全体のステップ

#### 1) ステップ1 (プリテスト)

期間：2001年10月

西原康行・佐藤勝弘による適応行動モデルの調査票<sup>1)</sup>を一部改良し、プリテストを行い、質問項目の精度を高めた。プリテストの配布数は以下の通り。  
配布数：174名（有効回答率：97.1%）

#### 2) ステップ2 (開催前住民調査)

期間：2002年2月

調査票を用い、開催前における地域住民のワールドカップに対する意識と関心を調査した。

#### 3) ステップ3 (開催直後住民調査)

期間：2002年7月

調査票を用い、開催直後の地域住民のワールドカップに対する意識と関心を調査した。

#### 4) ステップ4 (開催1年後住民調査)

期間：2003年6月

開催1年後の地域住民の関心を調査した。なお、このステップでの調査対象者は、ステップ3（開催直後）での適応行動モデルで、各項目に対する関心が高い人々（平均点以上）を対象に行った。

#### 5) ステップ5 (開催後の住民意識変容に関するフィールドワーク及び座談会)

期間：2002年8月より2003年6月

開催直後からの、行政、商工会議所、地元企業、新潟県サッカー協会、ボランティア組織などの動向を観察する中で、開催後も引き続きワールドカップを生かした活動を行っているボランティア組織に傾斜配分した参与観察を行い、エスノグラフを記述した。また、ステップ4の自由記述にて豊富な意見を記述した人々との座談会を行った。

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法

新潟市及び周辺町村における住民を対象に「配布

回収調査法」を実施。また、シカゴ学派<sup>2)</sup>の生活者研究を参考にした参与観察を実施。さらに、生活者の視点での2回の座談会を実施。

### 2) 調査票による調査の抽出方法

ジェンダー、年代による「層別抽出法」を採用したが、年代については、一部においてサンプル数が少なかったため、スポットライトサンプリングを実施。

### 3) 調査票のサンプル数

配布数：1,414名／有効回答数：1,038名／有効回答率：73.5%

### 4) 参与観察対象

ボランティア組織「ウェルカム新潟」事務局長他14名

### 5) 座談会メンバー

N氏（男性、20歳、大学生）／K氏（男性、47歳、ボランティア団体事務局長、1級建築士事務所主宰）／H氏（男性、67歳、新潟市内 町内自治会長）／F氏（男性、34歳 新聞記者）／M氏（男性、26歳、司法修習生）／Hiさん（女性、24歳、会社員）／Kさん（女性、33歳、パート、主婦）／Nさん（女性、37歳、公務員、主婦）／Y君（男性、新潟市内小学校3年生）

## 3. 調査方法論

本研究では、西原・佐藤による適応行動モデル、量的調査でとらえきれない生活者の微細な行動や意識について参与観察、調査結果に基づく座談会を複合的に取り入れた。

### 1) 適応行動モデルによる調査

開催前、開催直後、開催1年後の関心の変容について適応行動モデルを使い、明らかにした。具体的には、住民の関心度と、日常生活における重要度（以下「重要性」）、サービスや情報の取得容易性と質の高さ（以下「サービス」）、そのサービスの享受による満足度（以下「満足度」）の3つの要因の相関関係を把握した。

### 2) 参与観察による調査

1) の量的調査で見過ごしてしまう生活者の微細な行動や意識について、その組織の一員として参加することにより、そこから見える人々の行動や発言に耳を傾け、記述する。特に、シカゴ学派の方法論を取り入れ観察を行ったが、参与観察におけるラポール、オーバーラポールについては、調査者自身の心的コントロールを第3者から観察及び指摘してもらうことにより克服した。また、参与観察の視点

を生活者に置く際に最も注意した点として、「懸命に生きている『生活者の視点』」で観察し、調査者自らが「調査者」ではなく、「生活の『実践者』」として積極的に調査対象に係わることにより、調査対象者に「調査者」と思わせない関係を築いた。

## 調査結果

### 1. 適応行動モデルによる変容

#### 1) 観戦行動という側面

表1は、J2アルビレックス新潟（以下：アルビ新潟）、Jリーグ全体、海外リーグ、日本代表について、「テレビ視聴」「スタジアムでの観戦」「新聞、

雑誌などの記事の購読」に対する関心を、開催前、開催直後、開催1年後で調査した結果である。アルビ新潟は、スタジアムでの観戦行動に対する関心の高さと、その関心を規定する各項目（「重要性」、「サービス」「満足度」）が、開催前、開催直後、開催1年後でほとんど変化がなく、高い相関を示している。一方、テレビ視聴への関心とそれを規定する各項目の相関は低いが、これは、アルビ新潟のテレビ中継が行われていないことが影響していると考えられる。さらに、新聞や雑誌の記事については、重要性和サービスは高いにもかかわらず、満足度が低い相関を示している。したがって、新聞や雑誌の記事

表1 観戦行動への関心を規定する要因の相関

		アルビ新潟			Jリーグ全体			海外リーグ			日本代表			
		TV	スタジアム	記事	TV	スタジアム	記事	TV	スタジアム	記事	TV	スタジアム	記事	
		(N=272)	(N=272)	(N=272)	(N=157)	(N=157)	(N=157)	(N=114)	(N=114)	(N=114)	(N=483)	(N=483)	(N=483)	
大会前	重要度	重相関	0.047	***0.451	***0.459	0.131	0.162	**0.281	***0.398	0.126	***0.335	***0.391	0.163	***0.393
		単回帰	0.082	***0.483	***0.495	0.287	0.113	***0.289	***0.311	0.115	***0.486	***0.41	*0.155	***0.415
	パフォーマンス	偏相関	0.071	***0.411	***0.405	0.256	0.101	**0.263	***0.283	0.101	***0.465	***0.399	0.149	***0.402
		単回帰	0.119	***0.326	**0.254	0.109	*0.192	**0.241	***0.413	0.193	*0.211	***0.401	0.142	***0.406
	満足度	偏相関	0.162	***0.319	*0.218	0.102	*0.177	*0.214	***0.405	0.176	*0.197	***0.386	0.137	***0.389
		単回帰	0.012	***0.337	*0.213	0.081	*0.212	**0.292	***0.382	0.211	**0.238	***0.389	**0.295	***0.394
	偏相関	0.008	**0.312	0.194	0.077	*0.193	**0.263	***0.356	0.197	*0.221	***0.359	**0.264	***0.362	
	大会直後	重要度	重相関	0.042	***0.421	***0.442	0.137	*0.191	**0.286	***0.403	0.154	***0.341	***0.584	**0.221
単回帰			0.081	***0.473	***0.489	0.275	0.101	**0.288	***0.307	0.111	***0.493	***0.592	**0.312	***0.621
パフォーマンス		偏相関	0.062	***0.398	***0.401	0.236	0.091	**0.252	***0.294	0.097	***0.469	***0.569	**0.298	***0.612
		単回帰	0.101	***0.314	**0.243	0.112	*0.223	**0.243	***0.405	0.111	*0.192	***0.551	*0.159	***0.632
満足度		偏相関	0.091	***0.299	*0.219	0.105	*0.191	*0.215	***0.374	0.103	*0.182	***0.539	0.138	***0.619
		単回帰	0.013	***0.321	0.112	0.092	**0.237	**0.297	***0.387	0.092	**0.231	***0.573	**0.222	***0.622
偏相関		0.009	**0.303	0.103	0.081	*0.218	**0.265	***0.366	0.015	*0.219	***0.563	0.182	***0.619	
大会1年後		重要度	重相関	0.055	***0.434	***0.439	0.112	0.148	*0.217	***0.402	0.121	***0.353	***0.409	0.142
	単回帰		0.073	***0.463	***0.451	0.251	0.101	**0.274	***0.315	0.111	***0.498	***0.416	0.152	***0.328
	パフォーマンス	偏相関	0.054	***0.401	***0.411	0.236	0.091	**0.269	***0.285	0.092	***0.471	***0.409	0.142	***0.301
		単回帰	0.097	***0.322	**0.229	0.102	0.152	**0.246	***0.411	*0.189	**0.221	***0.362	0.139	***0.311
	満足度	偏相関	0.088	***0.305	*0.215	0.088	0.131	*0.193	***0.401	0.173	*0.204	***0.333	0.121	***0.298
		単回帰	0.153	***0.351	0.115	0.103	*0.192	*0.211	***0.381	*0.212	**0.235	**0.301	**0.283	**0.254
	偏相関	0.122	***0.322	0.109	0.092	*0.185	*0.196	***0.353	*0.199	**0.221	**0.288	*0.277	*0.217	

\*:  $P < .05$ , \*\*:  $P < .01$ , \*\*\*:  $P < .001$

表2 行う・子どもに託すことへの関心を規定する要因の相関

		自らプレー		子供信託	
		(N=211)		(N=147)	
		重相関	単回帰	重相関	単回帰
大会前	重要度	単回帰	0.152	*	0.192
		偏相関	0.133	*	0.214
	パフォーマンス	単回帰	0.129	*	0.201
		偏相関	0.162		0.152
	満足度	単回帰	0.157		0.135
		偏相関	0.178		0.172
	重相関	単回帰	0.175		0.162
		偏相関	0.175		0.162
大会直後	重要度	単回帰	***0.419	***0.482	
		偏相関	***0.619	***0.719	
	パフォーマンス	単回帰	***0.601	***0.669	
		偏相関	0.173	0.199	
	満足度	単回帰	0.142	0.182	
		偏相関	***0.542	***0.592	
	重相関	単回帰	***0.519	***0.541	
		偏相関	0.151	0.172	
大会1年後	重要度	単回帰	0.138	*0.196	
		偏相関	0.124	*0.191	
	パフォーマンス	単回帰	0.152	0.136	
		偏相関	0.144	0.119	
	満足度	単回帰	0.172	**0.251	
		偏相関	0.162	**0.227	

\*:  $P < .05$ , \*\*:  $P < .01$ , \*\*\*:  $P < .001$

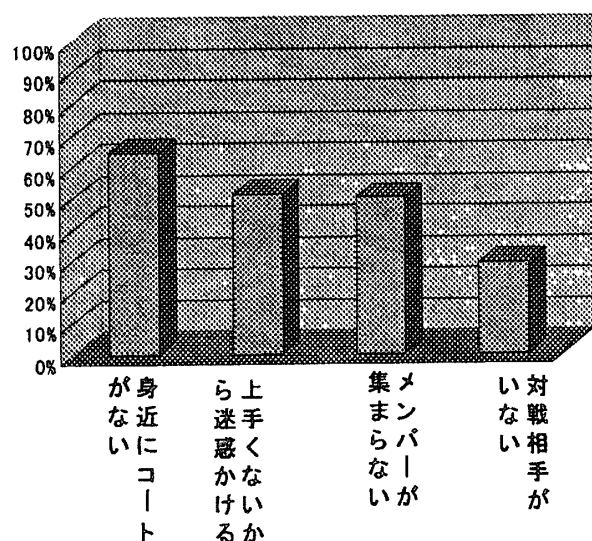


図1 1年後自らプレーすることの抵抗条件

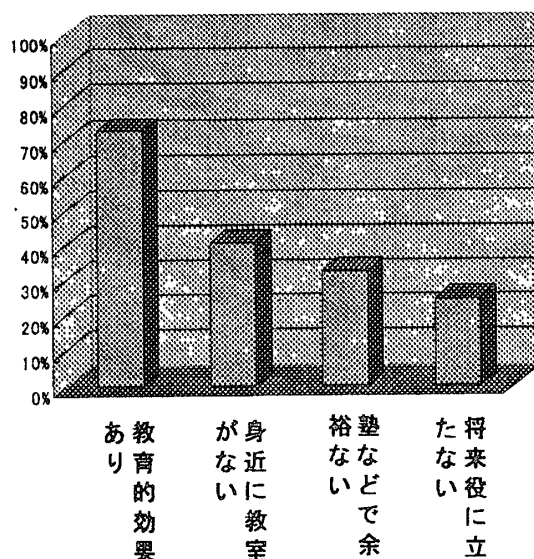


図2 1年後子供に行わせることの抵抗条件

事内容の充実を図ることの必要性をうかがい知ることができる。なお、座談会にて本調査結果についてディスカッションした結果、「単に試合結果を掲載する」「試合の経過を掲載する」だけではなく、得点したアスリートの背景にある練習の努力や、戦術分析といった精度の高い内容を読者が求めているという意見が出された。

Jリーグ全般に関しては、新聞記事に高い関心を示しているが、その他のメディアに関する相関は低い。一方、海外リーグでは、TV、記事で高い相関を示している。日本代表の試合には、テレビ視聴、新聞や雑誌の記事で関心とそれを規定する各項目で高い相関を示しているが、スタジアムに関しては低い。これは、新潟において日本代表の試合が行われていないことが影響していることが考察される。また、大会前と大会直後で重要度と満足度で有意な相関があるのは、開催前の新潟で行われたコンフェデレーションズカップや日本代表の試合を他のスタジアムで観戦した影響であると考えられる。

総じて、アルビ新潟やJリーグ全般、海外リーグについては、ワールドカップ開催が1年後の関心に大きく影響したとはいえないということが考察される。

## 2) 行う、子どもに託すという側面

表2は、自らプレイしたい、あるいは自らプレイはしないが子どもに託したい（習わせたい）という関心について表している。この表から、開催直後は自ら行いたいという関心と子供に託したいといった関心とその規定項目の相関が高まったが、1年後には、再び開催前の関心に戻っている。ただし、子供

に託したいといった関心では、重要性について、開催前、開催直後、開催1年後で有意な差に変化がないことから、子供にサッカーを行わせる事の重要性は定着していると考察される。また、満足度では、開催直後と開催1年後で相関があることから、W杯開催による効果と考えることができる。図1は、開催直後に子どもに託したいと思っていたが、開催1年後にその関心が低くなった人々の自由記述の高い割合の項目を取り上げて示している。

この図から、「将来役に立たない」と考えつつも、「教育的効果がある」と記述している人の割合が多く、また「身近に教室がない」という抵抗条件が上がっている。さらに、表2のサービス（十分なサービスが提供されている）に相関がない。以上の結果から、サッカーを習わすことの重要性和満足度は高いが、サービス条件が整っていないという抵抗条件が運動者行動を阻害していることが明らかとなった。今後、身近な場所に教室などのサービスを充実させることにより、需要が高まる可能性を示唆している。

図2は開催直後にサッカーを行いたいと思っていたが、開催1年後にその関心が低くなった人々の自由記述の高い割合の項目を取り上げて示している。ここでは、身近にコートがないといった抵抗条件があがっており、図1の結果を鑑みても、身近にサッカーができるエリアとプログラムの充実が望まれる。さらに、図2には、「やりたいけれど下手だから」といった主体的条件に関する抵抗条件や「メンバーがいない」「対戦相手が見つからない」といった抵抗条件があがっている。座談会における提言と

表3 ボランティアへの関心を規定する要因の相関

		一般ボランティア (N=126)		スポーツボランティア (N=126)	
		イベント	日常	大規模	日常
大会前	重要度	重相関 ** 0.224	0.095	* 0.205	0.139
	単回帰	** 0.246	* 0.183	** 0.242	** 0.244
	偏相関	** 0.221	0.152	** 0.214	* 0.219
	パフォー マンス	単回帰 *	0.193	0.092	* 0.181
	偏相関	0.166	0.082	0.153	0.137
	満足度	単回帰	0.192	0.092	* 0.191
大会直後	重要度	重相関 *** 0.386	0.142	*** 0.493	0.152
	単回帰	*** 0.389	0.111	*** 0.499	** 0.231
	偏相関	*** 0.373	0.1	*** 0.475	* 0.204
	パフォー マンス	単回帰 *** 0.306	0.072	*** 0.45	0.143
	偏相関	*** 0.295	0.112	*** 0.431	0.132
	満足度	単回帰 *** 0.348	0.063	*** 0.488	0.121
大会1年後	重要度	重相関 *** 0.324	0.119	*** 0.489	0.114
	単回帰	*** 0.386	* 0.192	*** 0.492	* 0.182
	偏相関	*** 0.335	0.167	*** 0.475	0.175
	パフォー マンス	単回帰 ** 0.231	0.093	*** 0.442	0.139
	偏相関	** 0.273	0.062	*** 0.433	0.121
	満足度	単回帰 * 0.221	0.089	*** 0.485	0.099
		偏相関	* 0.201	0.067	*** 0.461

\*: P &lt; .05, \*\*: P &lt; .01, \*\*\*: P &lt; .001

して、「やりたいけど下手だから」という抵抗条件には、昨今の容易にボールコントロールできる人工芝の整備、「メンバーがいない」「対戦相手がいない」といった抵抗条件には、インターネットによる情報の受発信といった抵抗条件を取り除く施策が有効であるという提言が出た。概ね、重要度と満足度が高いため、上述のサービスを提供することにより、主体的な運動者行動に変容する可能性が高いと考えられる。

### 3) ボランティアという側面

表3は、ワールドカップのような大規模スポーツイベントの一過性のボランティアと、日常のスポーツボランティア、さらに、一般のイベントボランティア（国際会議など）と日常的なボランティア（介護、福祉など）について、全て同じ対象者に調査した結果である。この表から、「メディアを通じた観戦行動」や「自ら行きたいという意識」「子供に託す」といった項目との大きな違いとして、W杯開催直後と開催1年後で相関が高く、特に1年後にボランティアの行動に関する関心が落ちていない点あげられる。つまり、ボランティアがもっともW杯による関心に影響を及ぼし、それが維持され続けているということが言える。ただし、日常のボランティアは、イベントのような一過性のボランティアの行動と結びつかないこともこの表からうかがえる。一方、ワールドカップといった大規模スポーツイベントのボランティアは、スポーツに限らず、一般のイベントボランティアにも関心を示していることが明らかになった。

表4 関心の割合変動と1年後の影響率

N = 1038

主成分分析における項目	開催前から (開催半年前)	開催によって (開催直後)	開催1年後 (開催1年後)	(影響率)
アルビレックス新潟への関心	24.3%	26.2%	25.0%	2.8%
Jリーグ全体への関心	13.8%	15.1%	14.3%	3.5%
海外リーグ(特に欧州)への関心	9.1%	11.0%	9.5%	5.3%
日本代表への関心	31.9%	46.5%	30.5%	-4.2%
一般ボランティアへの関心	6.5%	9.5%	7.8%	20.9%
スポーツボランティアへの関心	7.8%	12.1%	11.0%	40.7%
自らプレーしたいという意識	6.0%	20.3%	6.5%	8.1%
子供に習わせたいという意識	3.4%	14.2%	3.6%	5.7%

## 2. ボランティアの意識(参与観察から)

表4は、先の適応行動モデルによる調査を単純集計し、各項目の割合から、開催1年後の影響率を算出したものである。この結果から、ボランティアに関する意識は、開催1年後も住民の心の中で生きていることが伺える。本項では、このボランティアの意識について、量的調査では把握できない微細な意識を参与観察から描く。

### 1) 縛りを嫌う自主的なボランティア

ワールドカップ新潟開催において、ウェルカム新潟！2002（住民が自主的に立ち上げたボランティア団体）の果たした役割は大きいといわれている。新潟市が開催後の活動の記録として編集した「2002 FIFA ワールドカップ ようこそ新潟へ」では、ウェルカム新潟！2002の企画した活動や記事、コメントが半数以上を占めている。主な活動は、「グラスルーツの交流イベントの企画、実施」「市外から来る人々への道案内」「お勧めの食事処」が掲載されているワールドカップマップの作成と配布」「沿道の花壇造り」「ゴミ拾い」「新潟駅南口歩道（スタジアムへのアクセス通り）へのメモリアルプレート埋め込み」などである。新潟市のワールドカップを担当した行政職員のN氏は次のように語った。「ウェルカム新潟のようなボランティアをわれわれ行政が作る予定だった。しかし、ボランティアを行政が組織すること自体、無理だということが徐々にわかってきた。市報で募集を呼びかけてもなかなか集まらない。集まった人たちに説明会をすると辞退する。助かりましたよ。ウェルカムみたいなボランティアが出てきてくれて。」一方、本ボランティアの事務局長のK氏は言う。「行政は『ボランティアをさせてやる』とか『市報に出しさえすれば、募集が殺到するだろう』といった認識しかなかった。だからそれが自然と態度にでてきて、市民は嫌気をさす。ボランティアをするってそういうことじゃないんですよ。それと、説明会で『こういうこととこういうことをして下さい。これをしてはいけません』なんて

言われたら、みんなやらないよ。」新潟におけるワールドカップボランティアは、以上のような行政サイド、ボランティア団体の代表者の語りからもわかるように、権力的に縛られることを嫌う、自ら自主的に企画し、考えることを望むといった意識が極めて高いことがうかがえた。

## 2) 緩やかな人と人との関係性 (組織)

ボランティア団体の事務局長のK氏は、「僕もそうだけど、気楽な気持ちでみんな参加しようと思ってるのに、『これを必ずしてください』みたいなことをいわれたらみんな逃げちゃう。どっかに逃げ道を作っておいて、いつでもやめられるような雰囲気にしてあげなきゃ。住所録なんか作っちゃだめだよ」

また、このボランティアの発起人であり執行部として中心的な活動をしていた10人の事務局はお互いにデータベースを作り、きちんとした住所管理をしているわけではなく、携帯電話に電話番号だけ登録していたり、手帳に電話番号だけ記述してある程度のものである。どんな職業かといった程度のことはお互い理解しているが、どこに勤めていて、どこに住んでいるのかは把握していない。ワールドカップボランティアの発起人であり、執行部であるこの10人の関係すら、このように緩やかな関係を保ち続けているのである。この緩やかな関係が、ボランティアの人と人との関係性 (組織) にとって、きわめて重要であることが明らかとなった。

## 3) ボランティアを突き動かすもの

K氏を中心としたボランティア団体は、いつ、どんなきっかけで結成されたのか。それを明確に答えられる人は、10人の世話人といわれるボランティア団体のいずれの方もあいまいだとしている。ただし、K氏は漠然としてではあるが、おそらく1999年に新潟市が開催した市民への理解を得るために企画された「市民懇話会」に招かれ、説明を受けたときに「やろう」と決意したという。しかも、その決意は、市から頼まれたわけでもなく、市が「ボランティアを必要としている」といった提案があったわけでもないという。もともと、この10人は、自主的な街づくり研究会を開催したり、スポーツ以外の新潟における文化活動を支援する活動でよく顔をあわせる人々だという。事務局メンバーのS氏は「遊ぶ」という言葉をよく発する。「ボランティアは大人の遊びのようなもんですよ。ディズニーランドに行くようなわくわく感。お金を払ってディズニーランドに行かなくても、同じ遊びがワールドカップで体験できる。それもボランティアすることです。」ディズニ-

ランドに行くようなわくわく感は、内心の価値への義務を裏付ける語りとして表現されている。つまり、権威などに内心を曲げてまで服従するという近代の現実社会からの解放<sup>3)</sup>であり、子供がディズニーランドに行くことで学校や社会に服従することから逃れられる開放感に重なる。ただし、『大人の遊び』という表現は、ボランティアが個々人の様々な考え方、行動様式、あるいは個人の間には違いがあることを認めた上で、他者への関心を通して、異なる他者への許容的な態度の上に自ら遊ぶという、さらに、その許容的な態度自体も遊びとして楽しむ精神を浮かび上がらせることができる。ディズニーランドに行く子どもの遊び感覚と、ボランティアの「大人の遊び」の感覚は、この部分に違いがある。

## 4) ボランティアと報酬の関係性

ウェルカム新潟のボランティア団体の活動に参加すると、黄色のTシャツが貰える。そして、このTシャツがほしいが故にボランティアに参加したいという人々や、この活動で金銭的な報酬が得られると思って訪ねてくる若者も多かった。Tシャツ担当のAさんは、「よく言われました。『ボランティアのバイトしたいんですけど』でも、私たちはそんなお金ないし、でも、その気持ちはわからないでもないから断ったりしない。お金は出ないけどお金以外で得るものがあると思うから参加してって言いました。それと、なんかもらえますかって。一応Tシャツは提供しますが、そういう目的で参加する人はすぐにいなくなりますね。なかには、はまってく人もいますけど。」ボランティアを一元的に報酬を目的にしている組織、あるいは、外的報酬を目当てにする人々を受け入れない組織といった視点で見ることにはできない。外的報酬を目当てにする人々を受け入れる寛容さと、それらの人々も取り込んで、うまくマネジメント (動機付け) させる柔軟性がボランティアに内包されていることが考察される。<sup>4)</sup>

## 5) 非日常のボランティアと日常のボランティア そして1年後の再会

事務局のサブリーダー的な役割を行っているAさんは、ワールドカップボランティアに参加した人々の特徴を次のように語った。「私たちは、祭りで遊んじゃおうという発想です。ですから、普通の高齢者の介護をしたり、ゴミ拾いを行うことは、ちょっと」「空間の演出が大切だと思うんですよ。外国人がたくさんいて、お祭りの街のにおいがする。その中で汗を流して、私たちが主役を演ずる。その中で汗をかいている自分ていいなって思うんで

すよね。」ワールドカップのボランティアは日常的なボランティアと必ずしも同じ概念で説明できない。Aさんのこの発言は、先のSさんの「ディズニーランドに行くようなものですよ」といった表現にシンクロナイズする。つまり、非日常的な空間演出の中で、自分がその空間の主体として楽しむのである。

開催1年後の6月吉日、新潟駅南口で、ワールドカップ開催時にボランティアを行った人々がメモリアルプレートを埋め込んだ周辺地域のゴミ拾いを企画した。しかしながら、ボランティアに参加した人々の1割強(約100人弱)しか、このゴミ拾いには参加しなかった。参加者は、ボランティア当時、通訳、道案内、誘導、清掃、医務など、様々なボランティアを行ってきた人々であり、特に清掃に携わった人々が参加したわけではなかった。参加者の多くは、あの1年前の楽しかった「思い出」をこの機会に改めてかみ締めてみたかったという動機で参加したようである。そして、ワールドカップ開催時に清掃で参加していた人の一人であるYさんは、「あの時とは明らかに違いますね。今日は盛り上がり」に欠ける。当然ですけど。今日は、『1年前はこんなことしてたんだ』『楽しかったな』という回想の思いと、『街の掃除をしていいことしてるなって感じ』1年前はそんな義務感よりとにかく『楽しい』って感じだったから」

ワールドカップという特別な、非日常的な「時間」の流れと「空間」においては、ボランティアを単純に一つの概念で括ってしまうことを拒む。人々の日常生活空間の時間の流れと空間のにおいが、ワールドカップのような非日常性の空間の流れとにおいにシンクロナイズしないことが本参与観察から明らかになった。さらに、大規模スポーツイベントのボランティアとその他の多くの大規模イベントのボランティア(たとえばコンサートや国際会議など)では、祝祭性、身体性(ワールドカップは腕をまくって汗を流して頑張る雰囲気)という観点から、動機に微妙な違いがありながらも、祝祭性とは違った非日常性(大きなイベントを担当している自分がすてき)という観点での共通点が見出された。たとえば、FIFA、全国資本のメディア(マスコミ)、全国規模のスポンサースタッフ(TVでよく見る企業の人々)、海外の人々といった地方の人々が日々接点のないスタッフと同じ土俵で仕事をする事への憧れと楽しさ、そして一方で新潟人として新潟の特色を紹介してやろうという「もてなしの心」がスパイ

ラルした非日常性なのである。

## 結 語

以上の結果を総合的に解釈することにより、大規模スポーツイベントとしてのワールドカップ開催によって生活者としての地元住民の意識や関心がどのように変容したのかということと、その結果に基づいた若干の提言を行う。

1. 本研究の枠組みでは、ワールドカップ開催がJリーグや地元J2アルビレックス新潟の観戦行動に与えた影響は少ないといった結果になった。(J2アルビレックスは、ワールドカップに影響されない高い観戦行動が確立されているという表現が適切である。)しかしながら、海外リーグへの関心や、日本代表チームへの関心が高いことから(JリーグやJ2が日本代表や海外リーグにアスリートを輩出しており、Jリーグあつての日本代表という理念)、本結果は別の枠組みでの調査が必要であるということが明らかとなった。

2. ワールドカップによって、サッカーを行いたいと思ったが、1年後には関心が低くなった人々は、「身近に簡単にサッカーが楽しめる環境の整備」「仲間や対戦相手が容易に集められる情報ネットワークの整備」により、サッカーを行う関心が高まる可能性が示唆された。

3. ワールドカップ開催によって、子どもにサッカーを行わせたいという意識に変容した人々は、開催1年後にその関心が低くなった。これらの人々は、サッカーを子どもに行わせることの意義や重要性は高いが、「身近に習う環境がない」といった抵抗条件があることから、身近に習わす環境を整備することにより、需要が高まることが示唆された。

4. ワールドカップ開催1年後も生活者の関心が唯一消えない大規模スポーツイベントのボランティアについては、1) 行政主導ではない自主的な活動を大切にする風土を作ることが必要 2) 強制されない、緩やかな組織づくりが必要 3) 日常のボランティアと違った非日常的な祝祭性がボランティアを駆り立てるが、そこには大人としてのルールが存在するといった結論が導き出された。

本研究は、「日常生活における生活者」の視点で、調査を進めてきた。つまり、ワールドカップが日々の日常生活において生活者にどのように残っているのかという視点であり、行政や企業の立場から調査を進めていない。したがって、ワールドカップによる経済効果、遺産としてのスタジアムのあり方と



いった華やかな研究ではないため、多くの政策提言ができるような結果は出なかった。しかしながら、地味ではあるが、開催半年前、開催直後、開催1年後の住民の意識や関心の変容を探ることは、ワールドカップ開催を評価し、新たな政策を打ち出していく上で重要であると考えた。

今後の課題として、「日常生活における生活者」の視点とこいつつ、フィールドワークからまだ見えていない部分がかなりある。例えば、ワールドカップ開催により、異文化交流が盛んになった。それも行政が企画する「大きな交流」ではなく、日常の生活の中での交流（新潟で出会った海外の人とインターネットでメール交換している人や、韓国語を習い始めた人など）である。これらの人々と深く触れ合うことから、見えてくるワールドカップの遺産について今後引き続き調査を進めていく必要がある。

## 注 記

- 1) March. J. G. & Simon. H. A. の適応行動モデルをスポーツ行動に適応した西原康行・佐藤勝弘(1991)の調査票を用いた。
- 2) 「現代社会におけるスポーツ用品産業に関する研究」(西原 2001)において約半年間、工場の実際の製造現場で働いき、工場の人々と生活した経験を描いたフィールドワーク(エスノグラフ)に基づく。また、この研究は「同意製造工場」(マイケル・ブラウオイ 1979)や「自動車絶望工場」(鎌田 1983)といった経営や組織を産業研究の側面からとらえた方法論に依拠する。「ジャック・ローラー」(クリフォード R. ショウ 1998)も本調査方法論に影響を与えている。
- 3) マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(M・ウェーバー 1989)に依拠した考察。
- 4) 田尾雅夫は、外的報酬への期待を含め、「純粋な利他主義があるかどうか」という極端な議論はしないまでも(中略)それを過大にも過小にも考えない方がよいのではないか。(田尾 2001:81)と述べており、本考察もこれに基づいている。

## 【参考・引用文献】

- 1) Joseph Maguire, 1999, *Global Sport: Identities Societies Civilization, Polity Press.*
- 2) 宮台真司, 2003, 『絶望から出発しよう』ウェイツ。
- 3) マイケル・ブラウオイ, 1979, 『同意製造工場』シカゴ大学出版会。
- 4) 鎌田慧, 1983, 『自動車絶望工場』講談社文庫。
- 5) クリフォード R. ショウ, 玉井真理子・池田寛共訳, 1998, 『ジャック・ローラー』東洋館出版社。
- 6) 田尾雅夫, 2001, 『ボランティアを支える思想』アルヒーフ。
- 7) R. S. リンド, 中村八朗訳, 『ミッドウタウン』青木書店。
- 8) 三浦貴之, 佐藤勝弘, 2001, 『水泳授業における評価法の研究 - CS 経営の視点から -』日本体育学会 第52回大会 体育科教育専門分科会資料。
- 9) 見田宗介, 1996, 『現代社会の理論』p 124, 岩波新書。
- 10) P. ブルデュー, 石井洋二郎訳, 1990a, 『ディスタンクシオン 社会的判断力批判 I』p50, p306, 藤原書店。
- 11) P. ブルデュー, 石井洋二郎訳, 1990b, 『ディスタンクシオン 社会的判断力批判 II』p337, 藤原書店。
- 12) ジャン・ボードリヤール, 今村仁司・塚原 史訳, 1995, 『消費社会の神話と構造』p93, p 310-311, 紀伊国屋書店。
- 13) 佐伯啓思, 1998, 『現代社会論 市場社会のイデオロギー』p175, p187, 講談社学術文庫。
- 14) ダニエル・ベル, [1976] 1999a, 『資本主義の文化的矛盾 (上)』p 38 講談社学術文庫。
- 15) M・ウェーバー, 1989, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店。
- 16) 内田隆三, 1987, 『消費社会と権力』岩波書店。
- 17) 多木浩二, 1995, 『スポーツを考える』ちくま新書。
- 18) ダニエル・ベル, [1976] 1999b, 『資本主義の文化的矛盾 (中)』講談社学術文庫。
- 19) カール・マルクス, 1981, 『賃労働と資本』岩波書店。
- 20) デイビッド・スロルビー, 2002, 『文化経済学入門』日本経済新聞社。
- 21) アラン・バートン J, 2001, 『知識資本主義』日本経済新聞社。
- 22) ロバート D・パットナム, 2001, 『哲学する民主主義』NTT 出版。
- 23) 日本能率協会編, 1998, 『CS 経営のすすめ』日本能率協会マネジメントセンター。